三館連携「津山モデル」の歩みと展望

美作大学図書館
二宮　敦

１．はじめに

津山市を中心とした岡山県北部はかつて、美作国（みまさかのくに）と呼ばれていました。美作国では、幕末から学問が奨励され、宇田川玄随（うだがわげんずい）・玄真（げんしん）・榕庵（ようあん）、箕作玄甫（みつくりげんぽ）をはじめとした多くの優れた人材を輩出してきました。現在、津山市には、美作大学・美作大学短期大学部（以下「美作大学」）と、津山工業高等専門学校（以下「津山高専」）という２つの高等教育機関があり、地域社会や世界を舞台に活躍する人材を育成しています。

本稿では、美作大学図書館と津山高専図書館、さらに、津山市立図書館の三図書館を中心とした連携について、その成り立ちと現状を紹介します。

２．美作大学図書館の概要

美作大学は、「地域の暮らしを支える人づくり」を目的[1]として、1951 年には短期大学が、1967 年には 4 年制大学が創立されました。大学・短大を合わせた学生数（収容定員数）1,060 人の小規模大学で、「食」「子ども」「福祉」の３分野をその教育の柱としています。「食」の分野は大学の食物学科と短大の栄養学科が担い、管理栄養士の国家試験受験資格、栄養士免許などが取得可能となっています。「子ども」の分野は大学の児童学科と短大の幼児教育学科が担い、小学校教諭、保育士・幼稚園教諭免許などが取得可能となっています。「福祉」の分野は大学の社会福祉学科と短大の専攻科が担い、社会福祉士・介護福祉士の国家試験受験資格などが取得可能となっています。国家試験についてはいずれの分野でも全国トップクラスの合格率を誇っており、「大学ランキング」にて「高校からの評価ランキング」中国・四国地区総合評価第一位を獲得[2]したり、経済誌『エコノミスト』で「勝ち残る大学」「安定的に定員が充足している小規模大学」として紹介[3]されたりするなど、地方都市の小規模大学でありながら、その教育力を高く評価されています。

美作大学の設置母体である学校法人美作学園は、1915 年の津山高等裁縫学校の設立を緒とし、2015 年に創立 100 周年を迎えました。その記念事業の一環として、美作学園創立 100 周年記念館（以下「記念館」）が 2016 年 2 月 26 日にグランドオープンしました。記念館の 1～3 階に図書館が移設され、床面積は約 2,100 ㎡、席数は 238 席で、収容能力は将来的な集密書架の増設計画分を加えて 17 万冊となっています。また、記念館建設前に使用していた図書館は、その一部を閉架書庫として残し、利用の少ない資料や製本雑誌等を保管するために用いています[4]（収容能力 8.6 万冊）。

図書館の特徴として、図書館内に 2 つ、図書館外（記念館 1 階）に 1 つ、合計 3 つの異なるコモンズを設置したことが挙げられます。「ラーニングコモンズ」「サークルコモンズ」「オープンコモンズ」と名付けた 3 つのコモンズは、学生たちがお互いの学ぶ姿に刺激を受け合いながら、学修をさらに深めることを意図して配置されました。

美作大学図書館の地域開放については、1970 年頃より、一般利用者からの要望があれば受け入れてきました。ですが、当初から大学図書館の地域開放を PR してきたわけでなく、2000 年頃から徐々に PR しはじめたため、正確な開放開始日を定められずに今日まで至っています。利用者登録にあたって、居住地の制約や年齢制限を設けていない（小学生以下の来館については原則として保護者の同伴が必要）ことが特徴で、津山市在住の方や、近隣の市町村の方を中心に、県外の方も利用者登録を行っており、約 170 人が利用者登録して大学図書館を活用しています[5]。

３．津山市立図書館と美作大学図書館との連携

津山市立図書館は、1975 年に設置された公民館図書室を前身とし、1978 年に津山市立図書館として開館しました。1983 年に旧津山市庁舎に移転後、1999 年にアルネ・津山（津山市中心街にある複合商業施設）4 階に移転されました。その後、2005 年の市町村合併により、従来の津山市立図書館が本館となり、加茂町・勝北町・久米町の各図書館が地区館となって、図書館 4 館と自動車文庫「ぶっくまる」を擁する図書館になりました。蔵書数は 474,527 冊（2019 年度末）、年間の開館日数は 340 日（2019 年度）を誇り、広く住民の利用に供する体制を整えるとともに、2025 年の設立 50 周年に向け、住民の多様化・高度化する学修ニーズに応え得るサービスの提供に邁進しています。

美作大学図書館と津山市立図書館は、「利用者等の教育、学術及び文化の発展に資すること」を主旨として、2007 年 5 月 29 日に「津山市立図書館と美作大学附属図書館[6]との相互協力に関する協定」を締結しました。この協定は、以下の 4 点がその協力事項として記されています。

（1）図書館資料の相互貸借に関すること。
（2）図書館資料の文献複写に関すること。
（3）レファレンス（参考相談、調査、照会等）に関すること。
（4）教育、学術及び文化活動の推進に関すること。

この協定制定にあたっては、鳥取大学附属図書館と公共図書館との連携（2002 年に運用開始し、その後段階的に拡充。資料貸借のための物流を県立図書館の物流システムが担保している）の事例を参考にしたとのことです。

サービス開始にあたって、両者による協議が繰り返され、物流に関しては津山市立図書館と津山市役所（美作大学の南、数百メートルの距離に位置する）とを毎日往復する津山市立図書館の公用車による搬送便[7]を利用し、その運搬経路に美作大学を加えることで運用可能であるという判断に至りました。

この物流体制を用いた個人貸出、図書館間貸出サービスに、その他の実施可能なサービスを加え、相互協力の内容が構成されました。ここに、三館連携「津山モデル」の前身となる、津山市立図書館と美作大学図書館の二者による連携がスタートしました。

４．三館連携「津山モデル」誕生

津山高専は、1963 年に開校した国立の高等専門学校で、先進科学教育・研究を志す人材と理学の素養豊かな技術者を養成する「先進科学系」、次世代の産業社会を担う機械システム技術者を養成する「機械システム系」、環境エネルギー・エレクトロニクス社会を担う技術者を養成する「電気電子システム系」、情報システムを統合的に理解し、設計・構築・保守運用のできる技術者を養成する「情報システム系」の 4 つの系で構成される総合理工学科 1 学科と、専攻科からなります。

津山高専は、美作大学の東、数百メートルの丘の上に位置し、美作大学図書館からもその姿を見ることができます。津山高専図書館は、2013 年に改修され、開放的で機能的な利用スペースにＩＣＴ機器やミーティングルーム、可動式集密書架などが設置されています。主に理工学系の学術書など 8 万冊の蔵書があり、専門的な学習研究を支えています。 国立機関の図書館として、長らく一般利用者への利用開放を行ってきました。

津山市立図書館、美作大学図書館および津山高専図書館の三館は、「利用者等の教育、学術及び文化の発展に資すること」を目的に、2008 年 4 月 18 日に「津山市、美作大学・美作大学短期大学部及び津山工業高等専門学校の図書館の相互協力に関する協定」を締結しました。この協定では、前年に締結された津山市立図書館と美作大学図書館との協定と同じく、以下の 4 点がその協力事項として提示されています。

（1）各図書館資料の相互貸借に関すること。
（2）各図書館資料の文献複写に関すること。
（3）レファレンス（参考相談、調査、照会等）に関すること。
（4）教育、学術及び文化活動の推進に関すること。

ここに、国立（国立高専）、公立（津山市立）、私立（学校法人）という、運営母体が三者それぞれ異なる図書館連携が誕生しました。

この協定が、現在でも続く三館連携「津山モデル」の礎となっています。

なお、同日（2008 年 4 月 18 日）、図書館だけでなく、市・大学・高専の包括的な協定として、「津山市、美作大学・美作大学短期大学部及び津山工業高等専門学校の包括連携協力に関する協定」を締結しました。この協定は、「三者が包括的な連携のもと、様々な分野において相互に協力し、地域社会の発展、人材の育成及び高等教育機関の振興に寄与する」ことを目的としており、現在では、図書館の相互協力の他、市民公開講座の開催、教育・研究における相互協力など、多種多様な連携を推進しています。

５．三館連携「津山モデル」相互利用の内容

ここまで紹介してきた協定には、それぞれ、運用のための「手引き」が存在します。「津山市立図書館と美作大学図書館・津山工業高等専門学校図書館との図書館利用の相互協力の手引き」については、過去何度かの改訂を経て、サービスの整備・拡充を行ってきました。

しかし、大半のサービスは2008年の運用開始時に導入されており、現在もなお継続されています。本稿では混乱を避けるため、各改訂には特に触れず、この協定に基づいて現在行われている相互利用の内容を紹介します。

（１）利用者登録
（２）個人貸出
（３）図書館間貸出
（４）複写サービス
（５）レファレンスサービス
（６）各種セミナー、資料の展示、その他の行事

以下、詳しく見ていきます。

（１）利用者登録

美作大学図書館と津山高専図書館では、それぞれの学生および学校関係者に限り、津山市立図書館利用者の新規登録・登録変更の受付を行うことができます。現在は両校の新入生ガイダンスを中心に新規登録の案内を行っています。

（２）個人貸出

資料所蔵館の利用者登録を済ませている利用者は、三館どの館にでも資料を取り寄せることができ、取り寄せた館で資料を借りることができます。また、借りた資料は、三館どこにでも返却することができます。「三館すべての図書館が、お互いがお互いの地区館であるかのように資料の貸出・返却ができる」という、三館連携「津山モデル」の根幹をなす、もっとも重要なサービスです。

なお、津山市立図書館の資料に関しては利用者自身が津山市立図書館のホームページからWebで予約を行うことができ、資料受取館や、資料配送時の連絡方法なども同様にWebで指定することができます。

（３）図書館間貸出

「（２）個人貸出」は、資料所蔵館の利用者を対象とするサービスでしたが、利用者が常に資料所蔵館の利用者登録を行っている（あるいは、行うことを希望する）とは限りません。

そのため、主に資料所蔵館の利用者登録を行っていない利用者を想定して、三館連携以前から

存在する図書館間貸出サービスを継続して提供しています。資料受渡館の利用者であれば、図書館を通じて資料所蔵館から資料受渡館に資料を取り寄せ、資料受渡館で借りることができます。ただし、この場合、資料の返却先は資料受渡館のみとなります。

（4）複写サービス

三館それぞれが設置しているコピー機を利用して、それぞれの所蔵資料の複写を行い、三館どこででもその複写物を受け取ることができます。送付には資料の配送と同じく搬送便を用いており、利用者は送料を負担することなく、もっとも便利な図書館で複写物を入手することができます。

（5）レファレンスサービス

三館それぞれが所蔵資料やレファレンスツール・人的資源を活用し、レファレンスの回答にあたるサービスです。利用者は資料所蔵（等）館に出向くことなく、速やかにレファレンスの回答を受けることができます。

（6）各種セミナー、資料の展示、その他の行事

美作大学・津山高専の教員等が行う講演会や、学生団体によるイベントなど、各種セミナー、資料の展示、その他の行事とその広報も、この三館連携「津山モデル」に基づき実施されています。

学生団体が津山市立図書館のイベント（「夜のとしょかん」等）に参加したり、美作大学・津山高専それぞれの学園祭に自動車文庫「ぶっくまる」が参加することが定例の企画行事となっていたりします。さらに、2018 年の「三館連携 10 周年記念事業『地域と暮らしをおいしくする図書館（スパイス）』」、「図書館総合展 2018 フォーラム in 津山」など、全国から参加者を集める大規模なイベントなども開催されています。

これらのサービス・企画実施のため、「（7）三者協議」として、定例の連絡会議を開催し、各種報告や協議などを行っています。さらに、必要に応じて定例外の会議を開催することもあり、協力が必要な事項が発生した場合は、三者で協議の上、決定することとなっています。

6．三館と高校図書館との連携

三館の相互協力協定締結から半年後、2008 年 10 月 8 日に、三館と津山市内の全 6 高校（岡山県立津山高等学校、岡山県立津山商業高等学校、岡山県立津山工業高等学校、岡山県立津山東高等学校、岡山県作陽高等学校、岡山県美作高等学校）の図書館との相互協力に関する協定を締結しました。この協定は、三館と 6 高校図書館の包括協定という形を取らず、三館と A 高校図書館、三館と B 高校図書館、というように、6 高校それぞれ別々の協定を結んでいます。

このうち、岡山県美作高等学校図書館との協定のみが、高校図書館から図書を貸し出す条項を

協定内に盛り込んでいます[8]が、その部分を除くと、6 高校図書館で同じ内容の協定を締結しています。この協定により、三館だけでなく、各高校図書館でも以下のサービスが受けられるようになりました。

（1）利用者登録
（2）個人貸出
（3）図書館間貸出
（4）複写サービス
（5）レファレンスサービス
（6）各種セミナー、資料の展示、その他の行事

以下、詳しく見ていきます。
なお、いずれのサービスも、各高校の生徒および教職員のみを対象としています。6 高校図書館のうち唯一一般市民に利用開放している岡山県美作高等学校図書館においても、これらのサービスについては一般利用者まで対象を広げてはいません。

（1）利用者登録
各高校図書館で、津山市立図書館利用者の新規登録・登録変更の受付を行うことができます。各高校図書館では、カウンターや館内の掲示等で随時案内を行っています。

（2）個人貸出
津山市立図書館の資料について、同図書館の利用者登録を済ませていれば、その所蔵資料を各高校図書館に取り寄せることができ、取り寄せた高校図書館で借りることができます。また、借りた資料は取り寄せた高校図書館ならびに津山市立図書館のいずれでも返却することができます。
また、利用者自身が津山市立図書館のホームページから Web で予約を行うことができ、資料受取館や、資料配送時の連絡方法なども同様に Web で指定することができます。

（3）図書館間貸出
各高校図書館で、図書館を通じて三館および岡山県美作高等学校図書館の資料を取り寄せることができ、取り寄せた高校図書館で資料を借りることができます。ただし、資料の返却先は資料受渡館のみとなります。

（4）複写サービス
三館が設置しているコピー機を利用して、それぞれの所蔵資料の複写を行い、各高校図書館でその複写物を受け取ることができます。送付には資料の配送と同じく搬送便を用いており、利用者は送料を負担することなく、自分が所属する高校の図書館で複写物を入手することができます。

（5）レファレンスサービス

三館それぞれが所蔵資料やレファレンスツール・人的資源を活用し、レファレンスの回答にあたるサービスです。利用者は資料所蔵（等）館に出向くことなく、速やかにレファレンスの回答を受けることができます。

（6）各種セミナー、資料の展示、その他の行事

美作大学・津山高専の教員等が行う講演会や、学生団体によるイベントなど、各種セミナー、資料の展示、その他の行事とその広報も、この相互協力協定に基づき実施されています。

美作大学・津山高専・岡山県立津山高等学校の図書館支援学生団体による図書館支援学生交流会が 2011 年より年 1 回行われているほか、三館および岡山県美作高等学校図書館を回るスタンプラリーを（2018 年と 2020 年の過去 2 回）開催しています。

これらのサービス・企画実施のため、「（7）担当者協議」として、定例の連絡会議を開催し、各種報告や協議などを行っています。さらに、必要に応じて定例外の会議を開催することもあり、協力が必要な事項が発生した場合は、三館と当該高校図書館とで協議の上、決定することとなっています。

7．三館連携「津山モデル」の物流

ここで、三館連携「津山モデル」の物流を支える搬送便について紹介しておきます。

前述の通り、搬送便とは、津山市立図書館の公用車による資料や文書の運搬便のことで、従来津山市立図書館と津山市役所とを往復していた便の巡回ルートを各図書館にまで拡張することで運用されています。

搬送便は、原則として土日祝日を除いた毎日 1 便運行しており、概ね 14 時ないし 14 時半に津山市立図書館を出発し、津山市役所（本庁舎と東庁舎の 2 庁舎）と美作大学図書館を巡回し、資料や連絡文書等を搬送しています。特別な事由がない限り職員 1 名で巡回しており、津山高専図書館、各高校図書館については用件がある時のみ巡回する、という形で運用しています。

また、この搬送便の巡回経路を決めたり、相互協力に必要な情報共有を行ったりするため、三館と 6 高校図書館の連絡用メーリングリストが整備されており、津山高専図書館により管理・運用されています。メーリングリストは原則として正午までにその日の搬送に関する情報を配信し、その情報を基に津山市立図書館の搬送便担当者が搬送経路を決定します。具体例を挙げると、津山高専図書館から A 高校に届けたい資料がある場合は津山高専図書館→A 高校の順に巡回する、B 高校から美作大学図書館に届けたい資料がある場合は B 高校→美作大学図書館の順に巡回する、というように巡回順を決め、津山市役所（本庁舎と東庁舎の 2 庁舎）を含めたルートを決めて搬送を行います。巡回ルートは担当者が臨機応変に決めて運行されています。

その結果、祝日や週末を除けば、利用者の予約申込後、半日から 1 日程度で必要な図書館に資料を届けることができる運用体制となっています。現在では、Amazon や楽天などのネットショッピングで、注文当日や翌日に商品が届くことが当たり前になっており、利用者本位のサービス

だと評価されていますが、津山市では 10 年以上前から同等のスピード感を持った図書館サービスを構築できており、今なお維持し続けているのです。

なお、津山市役所（2 庁舎）、三館、6 高校はそのすべてが半径 2km の円内に立地しており、仮に全 11 ヶ所を巡回したとしても、その距離は 13～15km にしかなりません。学校・教育施設に限って言えば、コンパクトシティ化がこれ以上ないくらいに整備されていると言えるでしょう。この、盆地であるが故に自然生成された立地条件が、三館連携「津山モデル」構築の助けとなったと言えるかも知れません。

図１　「津山モデル」を構成する各図書館

８．三館連携「津山モデル」の特徴

「津山モデル」は前述の 7 項目で構成された多角的な連携であるものの、その根幹となるサービスは「三館すべての図書館が、お互いがお互いの地区館であるかのように資料の貸出・返却ができる」という、「個人貸出」サービスにあると考えます。

現在、あらゆる地域で、公共図書館と大学図書館、公共図書館と高校図書館など、館種を越えた連携が見受けられるようになりました。そんな中、この「個人貸出」サービスはそれほど目新しくもなく、地味なサービスだと捉えられるかも知れません。津山市民の方でも、これらのサービスを知っていても、そこに特別な驚きを感じない方もいます。良い意味でも悪い意味でも、地域に溶け込んでいる当たり前のサービスとなっています。

しかし、国立の高専、市立の図書館、私立の大学の三者、さらに、県立の高校、私立の高校と、設置母体が様々に異なる組織同士がこういった連携をするのは非常に珍しく、なおかつ 10 年以上の歴史を持つ連携というのは他に例がないと言って差し支えないはずです。

設置母体が異なるということは財源が異なるということであり、例えば「津山市の税金で買った本を、なぜ私学（や国立の学校）に提供するのか」といった声が出ても不思議ではありません。しかし、ありがたいことに現在は、そういったネガティブな反応よりも「三館連携は地域の財産です」「益々の充実を期待しています」といった声の方がより多く聞かれています。そのような声を聞くたび、三館連携「津山モデル」は、情報を得る権利や学びの環境を守り、豊かにしたいという市民の思いに後押しされているのだと感じます。もしかすると、本稿の冒頭に述べたような、美作国の時代から脈々と受け継がれてきた、学問を尊ぶ風土がそこに関係しているのかも知れません。

三館連携を「津山モデル」と名付け、高く評価して下さっている岡本真氏（アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表取締役）は、「高校、高専、大学はいずれも津山市の大切な財産です。これらの学校があるからこそ、津山は若者を引き留め、引き寄せられます。（中略）図書館は一義的には文化施設ですが、このような“足腰のサービス”を充実させることで、定住・移住を促す役割をも果たすのです」[9]と、三館連携「津山モデル」が地域の「定住・移住を促す」とまで断言されています。

９．三館連携「津山モデル」の実績

「津山モデル」の実績として、表１では津山市立図書館から美作大学図書館および津山高専図書館への貸出冊数と、両館からの返却冊数の推移をまとめています。貸出冊数と返却冊数が一致していないのは、貸出館と異なる館で返却される場合があるためで、美作大学図書館・津山高専図書館ともに、貸出冊数よりも返却冊数の方がかなり多くなっています。また、表２では津山市立図書館から 6 高校図書館への貸出冊数と返却冊数の推移をまとめており、表１と同じように貸出冊数よりも返却冊数の方がかなり多くなっています。「津山モデル」では、美作大学図書館・津山高専図書館から他の館へ資料を貸し出すというサービスも行っているのですが、津山市立図書館からの貸出冊数に比べるとかなり少ない冊数に留まっているため、今回は掲載を見送っています。

2008 年に開始し、12 年が経過した「津山モデル」ですが、その利用状況は右肩上がりとも伸び悩んでいるとも言い難い、複雑な増減を繰り返しています。

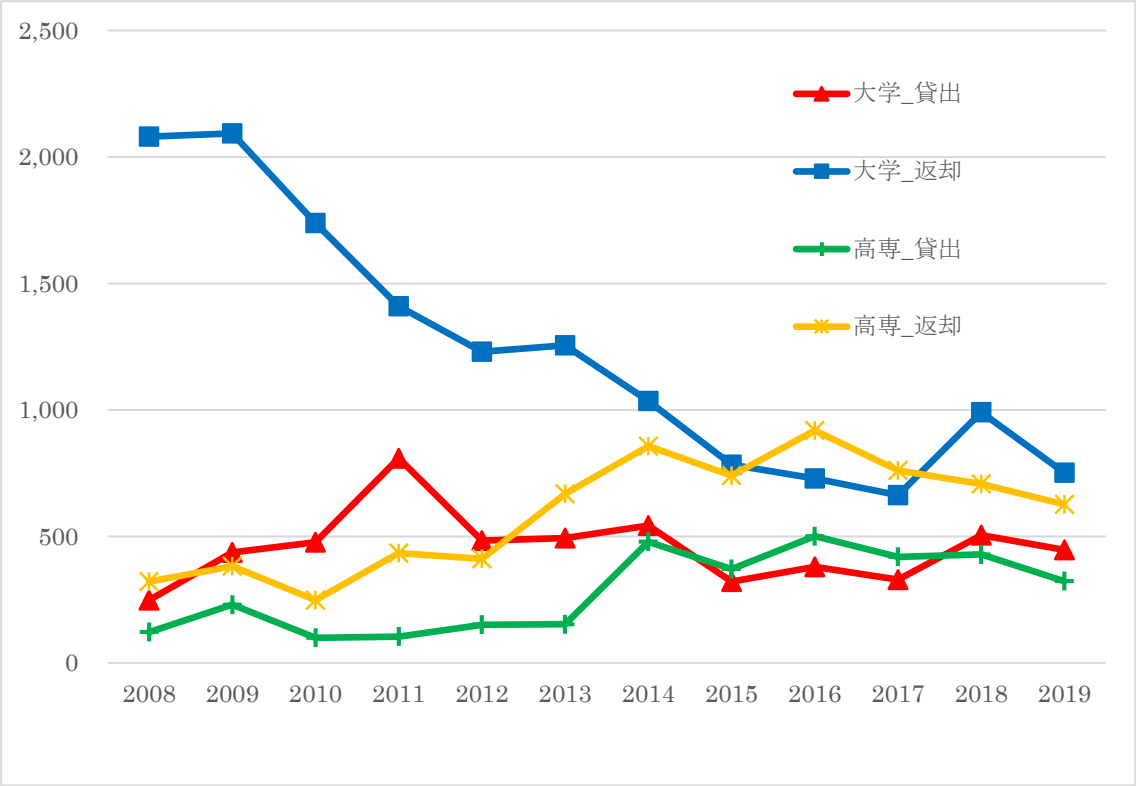

表１　津山市立図書館から美作大学図書館・津山高専図書館への貸出・返却冊数

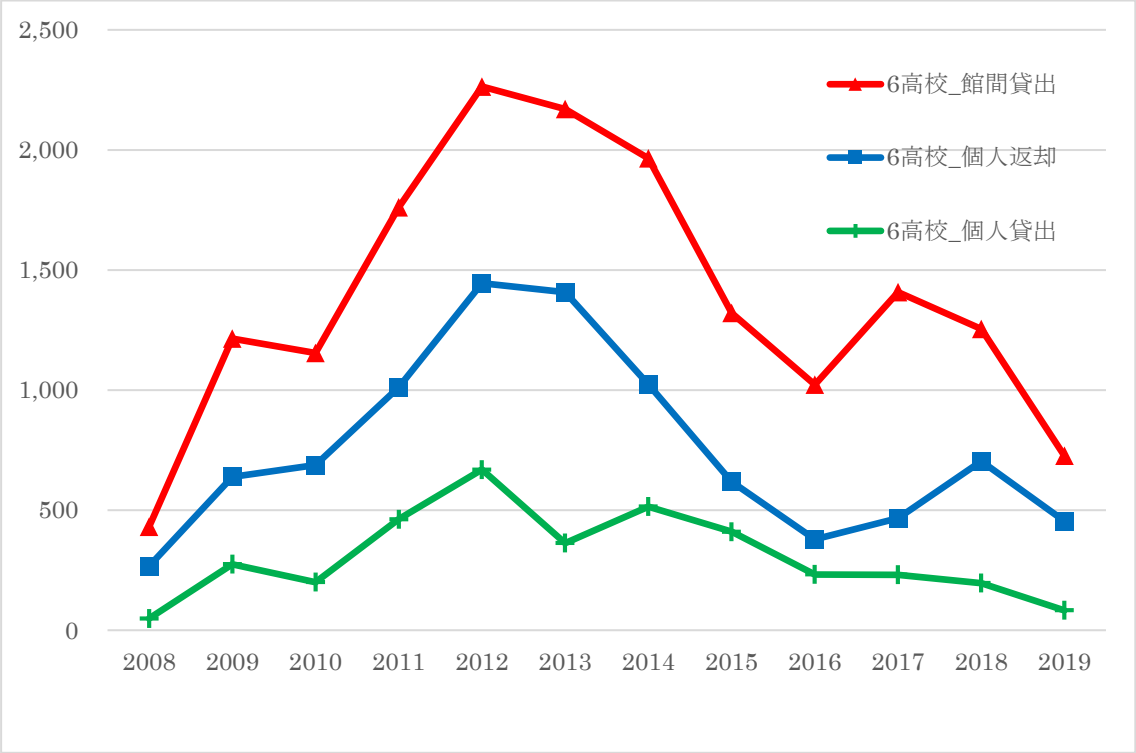

表２　津山市立図書館から 6 高校図書館への貸出・返却冊数（6 高校の合計）

本稿では「津山モデル」の分析・評価までは筆を進められませんが、今後分析・評価を行うにあたっては、最低限、それぞれの図書館単体での利用件数の推移と照らし合わせる必要があると考えます。また、美作大学図書館と岡山県美作高等学校図書館の 2 館間での貸出・返却冊数もかなりの数にのぼるため、無視することはできません[10]。さらに、高校は 3 年、大学は 4 年、短大は 2 年、高専は 5 年での就学を基本としており、年間 100 冊以上借りるようなヘビーユーザーが在学していると、その数年だけ利用件数が伸びるという点も、グラフを複雑化し、分析を困難にする要因となるでしょう。

１０．三館連携「津山モデル」の情報発信

三館連携「津山モデル」は、その連携開始時には「津山モデル」と呼ばれてはいませんでした。協定締結時に調印式を執り行い、新聞等で紹介して頂いたものの、それ以降はそれぞれの図書館が利用案内の一環やポスター等で情報発信するのみで、広く積極的に PR しているとは言えない状態でした。

前項で述べた通り、利用実績も順調に伸びているとはいえず、これは PR 不足が原因の一端であることは間違いがありませんでした。

そのような状況の中、三館連携の 10 周年を記念し、2018 年 1 月 20 日に「三館連携 10 周年記念事業『地域と暮らしをおいしくする図書館（スパイス)』」を開催しました。この記念事業では「地域をひらく未来の図書館」と題して岡本真氏に記念講演を行って頂きました。さらに、三館連携 10 周年記念誌『地域と暮らしをおいしくする図書館（スパイス)』を発行するだけでなく、動画コンテンツとして、三館連携 10 周年記念映像「地域と暮らしをおいしくする図書館（スパイス)」を作成・発表（後に Web 公開[11]）しました。

特筆すべきは、記念事業における岡本氏の記念講演です。この講演の中で、岡本氏は三館連携を絶賛し、「『津山モデル』と命名し、自信をもって喧伝すべき」と我々の背中を押してくれたのです。

さらに、岡本氏は共同通信社による配信記事[12]や、「図書館総合展 2018 フォーラム in 津山」の場においても、改めて「津山モデル」の紹介と賛辞を送ってくださいました。

その後、この「津山モデル」という名前を冠し、以下のような情報発信が行われていきます。

- 「図書館総合展 2018 フォーラム in 津山」「三館連携『津山モデル』と新しい団体貸出システム～学びの環境を耕す～」大河原信子（津山市立図書館副館長[13]）（2018 年 5 月 19 日）
- 「学びの環境を耕すー津山市立図書館の地域連携」大河原信子（津山市立図書館副館長[14]）『図書館評論』59 号（2018 年 7 月 1 日）
- 「美作大学図書館と国公私を越えた『津山モデル』10 年の取組」二宮敦（美作大学図書館係長）『教育時報』通巻 831 号（2018 年 11 月 25 日）
- 「未来につながるまちづくり～知的資源を活かした津山の活性化～」谷口圭三（津山市長)、鵜﨑実（美作大学・美作大学短期大学部学長)、磯山武司（津山工業高等専門学校校長）『広

報津山』No.770（2019 年 1 月）
・三館連携「津山モデル」パネル展示（於津山市立図書館展示コーナー）（2020 年 1 月 29 日～2 月 24 日）

こうやって、教育関係者、図書館関係者の目にしか留まらない専門誌だけでなく、津山市の広報誌などにも取り上げられ、少しずつ三館連携「津山モデル」の認知度が上がっているのを感じます。今後もさらに認知度が高まっていくことを期待しますし、本稿がその広がりの一翼を担えれば幸いです。

１１．広がる「津山モデル」効果

美作大学図書館では 2019 年 7 月から、岡山県美作高等学校図書館では 2020 年 7 月から、「カリコレ」サービスを開始しました。「カリコレ」とは、「借り（れる）コレ（クション）」の略で、津山市立図書館の図書 100~200 冊程度を団体貸出として借り受け、館内に展示・貸出する展示コーナー（およびサービス）名です。「カリコレ」で展示されている図書は、津山市立図書館が導入しているサテライト貸出システム「カリコレ」[15]で、利用者に貸出を行うことも可能です。津山市立図書館に出向くことなく、蔵書のイメージを持ってもらうことができる「津山市立図書館のショーケース」とも言えるサービスです。また、津山高専図書館ではサテライト貸出システム「カリコレ」を使用しておらず、常設ではないものの、2020 年 1 月から同様の展示・サービス提供を開始しました。

この「カリコレ」サービスは、津山市立図書館が従来から行っている団体貸出を利用したサービスです。三館連携「津山モデル」の相互協力協定に則ったサービスではありませんが、「津山モデル」で共に歩んできた協力体制や人的交流があったからこそ、サテライト貸出システム「カリコレ」のローンチ半年後という早さで実施できたと言えるでしょう。

同じように、三館では、資料の収集やレファレンスなど様々な面で協力が行われており、今後に向けても色々な企画が検討されています。検討する際に「相互協力協定に謳われているか否か」を確認することは二の次であって、ましてや、「館種や運営母体が違うので」という理由でサービス導入をためらうことはほとんどありません。津山モデルを構成する図書館にとって、それぞれの館が可能な範囲で協力することはもはや当然の認識になっています。

「地域の図書館が地域の住民・学生にサービスを行う」というシンプルな思いが三館連携「津山モデル」を生み、「津山モデル」の存在が、「地域の図書館が地域の住民・学生にサービスを行う」という思いを具現化し、成熟させ続けているのだと考えます。

１２．おわりに

2018 年に開催された「三館連携 10 周年記念事業『地域と暮らしをおいしくする図書館（スパ

イス)』」では、参加者からもこの「津山モデル」に期待する声が多数寄せられました。

「人と人とが交流して創造活動が生まれる場にしてほしい」

「若い方々が津山にいて良かったと思ってもらえるよう、連携を続けて頂きたい」

このような期待に沿えるよう、地域の図書館の連携をさらに深め、「津山モデル」をさらに進化させていきたいと考えています。

本稿の執筆に際し、データの提供やご助言・ご協力いただいた皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。また、コロナ禍にあって、当初予定されていた口頭発表とはなりませんでしたが、文書にて発表の機会をいただいた私立大学図書館協会西地区部会中国・四国地区研究会の皆様にも御礼申し上げます。各館にとって、多少でも参考となる部分があれば幸いです。ありがとうございました。

註

1 「美作大学の 4 つの理念・目標」は以下の通り。
・専門教育と教養教育の充実、および両者の調和を図ることにより、新しい時代の生活の向上に寄与できる、人間性豊かな専門的職業人の育成を目指す。
・小規模大学の特性を生かし、学生の個性を尊重し能力を向上させ、創造的で自立した人間の育成を目指す。
・地域社会の課題を反映させた教育研究への取り組みにより、社会の発展に寄与することを目指す。
・地域社会の人々に対し広く学習の機会を提供し、文化の進展に寄与することを目指す。

2 『大学ランキング 2019 年版』(2018 年 4 月 30 日）より。「中国・四国地区」の「総合評価」部門で、私立大学としては第一位。評価項目は「①進学先で生徒が伸びた」「海外留学制度の充実、外国人教員による英語の授業など、国際化に力を入れている」「③進路支援が充実」「④オープンキャンパスなど情報開示に熱心」の 4 項目。

3 「勝ち残る大学消える大学」『エコノミスト』97 巻 47 号 通号 4628（2019 年 12 月 3 日）より。

4 2020 年 9 月現在。この閉架書庫を有する建物は 2020 年度末までに解体する予定です。閉架書庫の資料は、一旦退避後、建設計画を進めている新 6 号館（仮称）の書庫に移動・保管する予定となっています。

5 登録者数は 2019 年度末の数字。美作大学図書館では、一般利用者の有効期限を当該年度末までと定めて運用しているため、毎年度末に一定量の利用者の有効期限が切れ、年度開始時の利用者数が一年間でもっとも少なくなります。なお、2020 年 4 月以降、新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大防止対策として、一般利用者の利用を制限しています（制限内容や範囲は何度か変更があります)。

6 美作大学図書館は、2015 年 4 月に館名を「美作大学附属図書館」から「美作大学図書館」に変更しました。本稿では混乱を避けるため、規程や協定等の名称のみ「美作大学附属図書館」を残し、本文中の館名は館名変更前後を問わず「美作大学図書館」で統一しています。

7 この便の正式名称は定められていません。「回送便」等いくつかの呼ばれ方をしていますが、本稿では「搬送便」で統一しています。

8 岡山県美作高等学校は、美作大学と同じく学校法人美作学園に属する私立の高等学校です。本稿では言及しませんが、美作大学図書館と岡山県美作高等学校図書館との間では、より高度な相互利用が可能となっています。

9 共同通信社配信記事「【オフタイム】＜未来の図書館を探して＞（2）3 館連携　定住促す“足腰のサービス”」より。『神戸新聞』(2018 年 3 月 22 日夕刊）等に掲載。

10 註 8 に同じ。

11 YouTube（美作大学公式チャンネル）にて公開。URL： https://youtu.be/Syhk8BFYrJg

12 註 9 に同じ。

13 肩書は当時。2019 年 4 月より津山市立図書館長。

[14] 註 13 に同じ。

[15] 「カリコレ」は、株式会社ワードシステムと津山市立図書館が共同開発した、クラウドで利用可能な図書館向けサテライト貸出システムです。2019 年 1 月にリリースされました。美作大学図書館で導入する際、展示コーナー（およびサービス）名として同名を流用しました。URL：https://www.wordsystem.co.jp/callichore/